

潮論台駿

69

特集・現代学生の存在と情念

決議・方針・闘争日誌——原資料を蒐集・整理
**反戦と真理の探究に生きた戦後青春の
 栄光と悲惨の証言！ 待望の刊行！**

きびしい戦後情況のなから反体制運動の一翼として、鋭く権力と対決する階層として自らを成長させてきた、戦後学生運動の史的位階づけと、それぞれの時代における学生の理念と心情そして情熱をかけた闘いの栄光と挫折の跡づけを行うことは、今日からの日本学生運動の豊かな可能性を生み出す第一歩となるであろう。敗戦から現在までの学生新聞、細胞機関紙、会議議案、議事録、書記局通達、指示、会議メモ、意見書、ヒラ、個人論文などの貴重文献を全国的規模で蒐集、サブ・ドキュメント、資料コメントを付し、運動の主軸を歴史的に追いつながら各大学の闘争実態もできるかぎり復元した。別巻には決定版ともいふべき詳細な年表、参考文献目録、実態調査を取り本編への理解の便をはかった。

■詳細内容案内出来！

■期待する
 末川博
 日高六郎
 梅本克己
 久野 収
 いいたも
 岩田 弘
 野間 宏
 荒畑寒村
 尾崎盛光
 信夫清三郎
 小川清介他

三一書房

東京神田駿河台2

資料戦後学生運動

三一書房編集部編

■全七巻・別巻一／(別巻1)判3,000円/刊行記念特価2,000円

社会思想社

神田
 駿河台3

創立20周年記念出版

トインビー著作集

全7巻別巻1

①②③④⑦ 一八〇〇円
 ⑤⑥⑧ 二〇〇〇円

歴史上の二十一の文明を比較研究した著書「歴史の
 研究」を中心に、「試練に立つ文明」「歴史家の
 宗教観」など世紀の歴史家の代表作を全て網羅した

河合榮治郎全集 全23巻
 別巻1

社会思想研究会編 各巻一、二〇〇円

編集委員 堀山政道 山田文雄 木村政康
 安井謙三 吉田忠雄 関谷 龍彦 猪木正道
 吉田正巳 吉田忠雄 内容案内送呈

図説・哲学思想史 A5判 本文二色刷

西洋の知恵 全2
 ラッセル著 東宮隆訳 各一五〇〇円



わが青春旧制高校

遂に成る！疾風怒涛八十年の青春大記録！
 写真大集 随想と記録

灼熱の青春、かぎりなき夢と情熱
ああ青春デ・カン・シヨ
 あふれるユーモア、冒険、学問と人生へのひたむきな情熱。明治
 から大正、昭和にわたる多感な青春群像の痛快で感動的な読物！
 ■只今大好評発売中 新書判二〇〇頁 三九〇円

史上初めて、二度と作れない旧制
 三十九校のすべてを収録した全二六
 頁の記念的ノベル豪華本！
 ■随想執筆者
 井上 靖 岡 潔 大宅 壮一
 入江 徳郎 南条 範夫 扇谷 正造
 吉行淳之介 木下 順二郎 永漢
 はか三四氏
 限定版・二千部
 十一月二〇日発売 価四八〇〇円
 東京・新宿・西大久保
ノベル書房
 振替・東京・四四六九番
 TEL・三六三三八五七・二二

後々の学生運動においては、およそ生きるとか、人間としての権利とかいうふうな問題は提起されなかったものだ。(全誌) 指示したにも学生運動の戦後史に於ける転換を見ることができ、指摘したことは、現在の学生が自己の実存の根拠から問題を先し常に存在を軸に回転していることである。それは「自己救済」の運動として位置付けることができる。そのような傾向は一つの強さや半面弱さを併存させるのだが、しかし愛護への志向は現代には、それは精神の絶対的飢渴への自己救済を根拠に振えることによつてはじめて為さるべきものなのだ。

(三)

現在の学生運動の果敢は、慶応・早稲田・明治そして中央に於ける一連の学費(及び学費)闘争にその基盤をもち、それらの闘争の過程の中に準備されてきたといつてよい。そして前記のどの大学においても、闘争は単に「学費値上げ」に対してのみ闘われたのではなく、寧ろ現行の大学制度そのものに対して闘われたといつたほうが得てよ。いまここで個々の大学の事件を掲げて詳述することはできないが、ただ指摘しておきたいのは単に学費値上げ阻止ということだけであれば、大規模且長期的なもの様な闘争は決して組み込まなかったであろうことだ。大規模・長期闘争は学生の現状の総体に対する日常的不満によつてある程度支えられて、かかる心情的な発露としての性格を供へていたといえよう。そのことは例えば中大に顕著に現出する如く、心情の発露の場としての闘争であつたために学費値上げが撤回されれば指導部の意図を外れ

見事に終熄せざるをえない構想をも併存させる。しかしそうした終熄は先ず現象面のことであつて、主体に於ては未解決の問題を残しながら常に次の闘争を準備させる。それは前記の大学だけではなく「一々」は記さないが殆どの大学の闘争の経過の中で指摘できるであろう。そのことはどの大学でも闘争の現行からは、政治的衝動行動に前年より多数の学生の参加をみることも何れも、その意識化の問題を意識的表出へと向かわせるに直接的契機として与つたのは学内闘争なのだ。

(四)

「いま、意識的に現実に向かせる契機としての『学内闘争』を掲げた直後が、そうした闘争主体の現在の主要な特徴として参加を通じてしか関係できない情況に対するさきやかな願望でもある。そうした願望は学内闘争での異常なまでの「大衆団交」の要求となつて現われるのだが、

「大衆団交を目指す」ということは、われわれの目的が『参加』にないのだというのを明確にする上で、本質的な態度をもつ。われわれの目的は、われわれ自身が一つの主体になるということにあり、つまり、われわれは自ら大学を構築してゆこうと考えるのだ。他者の構築した大学に参加する、つまり、われわれ自身が主体として扱われるようなことを目的とする、ましてお願いするなどは、まさに乞食の論理で問題にならない。しかし、現実がわれわれの大学構構に収斂状態に参入されていく、恐ろしくそれは苦痛のようなものとして参加せられていくであろうが、それは苦痛のみならず、一つの結果でしかない。」(座談会/安田講堂占

すまでの全般的ムードとなつてきている点に、私はそれが単純な不満ではなくて、構造化された不信であるところである。そしてそこに、ラディカルな「実力闘争」に対して、日頃学生運動にはほとんど関心をもちたぬ学生大衆を惹き出す批判的さえあるノン・ポリ層が同調してゆく心理的根拠を見出すのである。(高橋徹/直接行動の心理と思想「中央公論」九月号)

ましてやこうした移行に対して現代学生の主体性を指摘するものは余りに的外れであるとするよりも、学内闘争に於ける先鋭的學生への移行、学外闘争への参加は単に学内闘争に於けるのみではなく、既に意識形成の全過程に於いて準備されてきたのである。そうしたことを抜きにして平井啓之は次の如くに学生の現在の姿を指摘する。

(五)

「学生への批判を申しますと、いまの学生には個人の主体性が欠けている。それは実に別という気がする。大学の自治要求は要するに学生の権利意識だと思ふのです。(中略) 現行政政、その権利意識の主張、その後にある補償意識そのものについての個人の主体性に欠けている面が多い。それは東大なんかの学生であるほど、そういう面を感じます。たとえば、片方にラディカルな、初めからポリテックに関心がある学生が少数いる。同時に、ノン・ポリの、関心のない学生がいる、ところがひと月ほどの経過のうち、それまで無関心だったノン・ポリの学生がほんとうに変わつてしまつていくことを、おそろしいほどの事実として見ています。

そういういわゆるノン・ポリの学生が、いかに主体性が欠けている、逆になつて、免疫をもつていないか(開談/今こそ多層的な自治を「中央公論」九月号、傍草編集部)

確かにここにいわれることは別としても或る一面では現在の学生に「主体性」が無いといふことは指摘できるのだけれども、それは前記のような転換をもつて言うことはできないだろう。もしも主体性を云々としたら現存する一切のシロガネ(それは左翼だ)でなく体制側のそれらも含めて)と主体との関係に於いていわれることだろう。だからそれは学生のみに限つていわれる性質のものではなく、現代に於ける表現性問題なのだ。主体性問題とは直接の関わりを持たないかもしれないが、例えばマスコミなどによつて「言論」をもち「実力闘争」を否定する論理は主体と表現性、そして「言論」の現在の私的占有の中で占める位置を一切閉鎖するものと断言することができよう。そのことは現在のコミニケーション形態の問題でもある。

(六)

「私は、私に於ける場である『理性の府』において噴出している反理性的な流れを前にして、憂鬱という以上になまじい戦慄を受えなければならなかった。けつておぼけさではない、そのフアンティックな気流のなかで、現状に対する自覚的な自己疎隔によつてしか自己を正しく表現することができなかつたと思念した。『被抑圧者』の組織化された抗議を感じたからである。学生のなかの誰かが叫んだ。『感応してはならないだ。説得の論理に』」

発信者と受信者との精神的交流にとつての前記である感応性を否定し、この否認のエネルギーを組織化し、それ自体一個の記号に転化する事によつて、旧来の理性の府や説得のコミュニケーションが破れていった片面性や現実の荒廃を反省させるという姿勢、これこそ、学園における『実力闘争』の根拠に流れている新しいコミュニケーション」

拠から、大学革命へ(中央公論)九月号)以上の言は、大学参加及び大衆団交についての正当な指摘である。少なくともそうした視点と前提なしに限りなく大学制度改革を叫ぶことも、それは限りなく大学制度内へ吸収されるをえないだろう。そして次の如き大学を共同体として位置付ける認識に対する主体の側からされる反措定でもある。

「私は、今日の学生側からいわれるA参加Vの要求を、彼らの大学共同体への復権要求として受けとめるつもりなので、その参加の結果が真実に大学共同体としての可能性をひらくものとなるようにならざるための工夫を、教師と学生との協同作業で構築することを、即刻はじめて、どうして不都合なのか、いっそう合意がつかない。」(平井啓之「大学紛争への考察」中央公論「臨時増刊」学生問題特集号)

ここには現在の大学問題に対する処方(批判)もあり学生への思い遣りもある。そしてこうした指摘は学生の側にもその傾向があり、それは例えば「協議会」システムの獲得を求めていることなどにみられる。しかし、教授と学生の共同作業の可能性を求めたとしてもそれをどこに求めるのか、またその可能性が現在の中にあるのかどうか、それは決して教授が学生を「理解」することは成立しないものなのだ。まして教授に対する学生の「不信」が蔓延している中であつて、そして教授の「理解」に対してこそ不信が表明されているのであるならば、「教授の問題は、むしろ一人、二人ならば反て体制を唱へ、特定の範囲で行動している点にある。国家権力が一定の限界内で反体制的行動を公然と承認することによつて、彼らの民主的ポテンシャルを反体制的エネルギーのカタルシスの用具とし

て意味づけている以上、反体制的行動自体が、実は教授個人の主観的願望を超えて、体制内の機能を果すことになる。むしろ極言すれば、教授は反体制的なことなど口にしないうが、問題を明確にするのだ。学生層の問題がわれわれの問題であるように、教授層の問題は、まさに教授個人の問題なのだ。」(座談会/安田講堂占拠から、大学革命、)

このように学生がいふとき既に現在の教授の存在の根拠にまで迫るものも持っている。不闘争を各個人が徹底して追求すればする程各個人の存在様式の現在性に対する否定とならざるをえず、それをより教授に仮託して言つたのである。現在東大のなかで給料をもらつて、とくに工学部などの教授の場合、大企業から金をもらつて研究をやっている。そういう人物が私は少しは良心の痛みを感じます。そこまですつめたことをやるためには、少くとも教授が東大の職を辞して、ちやんとつち側へ入つてこなければできない。」(座談会/安田講堂占拠から、大学革命、)

このことは単に教授に向つてのみ言われているのではなく寧ろこの発言者そのもの、だから学生主体の存在に於いてこそいわれているのである。それはこの東大でいえば既に東大紛争を言明していることにも現われているのである。重層化してしまつて現在の大学の構造は、その根柢への問いなくしては決して解決できない問題であり、現在の学内闘争はそうした構造に楔を打ち込むべきであるといつていいのである。高橋は「実力闘争」をも急進的に置きながら、ノン・ポリ層の闘争主体への移行を以下のように述べている。現在の大学に対する不信が、すでにステロイド反応をひきおこ

ニケーション原理はかならない。(高橋徹/前掲論文)

東大での学費部大衆団交に臨んだときの感想だが、彼の生々しい実感が溢れていて興味ある部分だけども、それはさておくとして現実のミニニケーションを一面ではあるが描き出していることは貴重である。「対話の回復」とよく言われる語であるが、少くとも教授が教授であることに安心し、学生もまた現代の一切がそうである状況の中では「対話」はそれとして機能することは決してないといつてよい。寧ろ現在の対話の不可能性を一層推し進めることこそが肝要である、といふのは余りの独断過ぎようか。しかし、恐らく現代とはそういう時代なので、時代の「龍眼」たる学生運動家の「ゲバ権」にその象徴を認めたい。ゲバ権の論理を敷衍すれば、現在のマイナスイオンを徹底することではあまいか。イデオロギーをすべて連帯を成立させていることではあまいか。

大学問題が少しく横道へ外れることになつてしまつたが、学内闘争のダイナミクスは恐らく指導部の「大学紛争」の意向にも拘らず、恐らくコンバンディがいひひくもいたつたに結果してしまつた。それは「大学の大幅な改革は、学生運動の積極的な努力と教師たちの手によつて行なわれる。それは、われわれが望んでいるような根柢的改革とはならぬだろうが、ともかくわれわれは、いくぶんかの影響力を持つことになる。(中略)だが根本的なことは、なに一つ変らない。」(対談/想像力が権力をとる「中央公論」8月号)部分の進歩(改善)は絶対的根柢的革命であることはできず、平井啓之が「今の日本の現実のなかでは、A批判大学Vが実現の目標としての『広の限界』(大学紛争への考察、中央公論「前出臨時増刊」)であるとして掲げている「批判大学」も、

もし批判の機能を十分果たしたら国家はそれを認めはしないだろう(この「批判大学」とは、「文化共同体」であることを確認しながら、しかも、政治の問題をさけて通ることのないような可能性を実現した大学」のことである)。もちろん改善策を一概に否定することはできない、今後の経過を十分の注視をもって見ては行きたいと思ふ。

(四)

さて、これまで大学問題の中の学生を中心握えながら述べてきた訳だが、そうした学生運動の記事の中でマスコミによつて広げられる「長編」の位置を逆参照するものである。「一部学生」と「一般学生」という区分けは、彼らの良識を価値の基準(それは定数を持つこと)とすることによつて設定された。そして「一般学生」とは彼らの判断からする正常と異常の表裏に仮構された正体不明の怪物にしかすぎず、正常な世間の理想とする学生のことであり、定まった顔を持たず状況の変転と彼らの期待に従つて様々に変化しうべきまぼろしである。彼らの日常の判断が絶対的フルタであり、その視界を食み出して行く学生は彼らとは異なる故に「一部」としてしか見られない。そうしたフルターを「一般学生」が何故放浪した「一般学生」をまで巻き込んでしまふかは理解できないだろう。

ここで、マスコミが調査し位置付けた学生を見たい。読売新聞によれば学生を大別して、革新系・一般学生・保守・無関心の各

してある前提の自由、それはわたしにとってみればあればあるほどそれにはない、といった程度のものであるが、それは、自身自由とか議会主義という名の無意識的作用として、同時に合理的配制度の保障としてにぎしく働くというわたしの生活の一面、一面に重なり、その影をおとすのである。こうしたことはわたしに資本主義社会と無縁なものである。こうしたことはわたしに無関係に用意してある。だから、この吹きさらしの土壇場においては、おのれの感性と支配の感性とを性根すえてつきまわして行く以外にはありえないとも云えるのである。

もちろん、このような思考の一方の極には、当然集団の問題が存在する。
▲嵐底では多人数いりみだれての激戦をおこなって「にぎわい」と呼ぶ。けんかであらう、労資の闘争であらうと、それが激突混戦の度を加えれば加えるほど「にぎわうた」ということになる。「にぎわい」それは嵐底労働者にとっては集団の美名である。▼
ここに示される労働者群のエネルギーはわたしにまたまた誘いをかけてくるのだが、こうしたエネルギーはまたまた組織だつたことを超えてすぐれて直接的であり、いさかともどまらざることをしない。▲嵐底一発、各人各様の意思を超えて、超時間的空間をわがものにすがる情景が、いさかか閑散とした住宅地をかすめ飛んで行く。それが全てであり、それ以外の何ものでもないだろう。エネルギーの集中的表現が、生活思想の平土間あたりから噴出するということなのである。

近頃権力の制圧をまき散らしているアスファルト上を人解放ルをあらゆる方向へ解放すかたから想定することが出来る。そこにあつては下降意志を意識のうちに有することは同時に上昇意志をも作用させることができる。目に見えないという直接性を見えないものを見るという観念の動性が働き、関係概念における「目」までも断ち切られたものの意味の抽出を、その関係概念から導き出される新たな関係概念への洞察として、関係における絶対的断絶を、数量化された思考から切断し、コミュニケーション原理の基礎へと切開して行く。だからこそ、わたしに於いては強いていく可視の領域の氾濫への本質的対応は、わたしに於いては不可視領域への意識の駆動とそれへのゆるぎのない執着となるであらう。もちろん、それらがわたしの内でも整理されているかにはまだその感があるけれども、だからと云って整理されているかある。国家権力が金に眼目をつけず創出している条件状況と、わたしがわたし自身の内部におのれの力で切りつらう条件状況を。直接的対応は人々にとって、人民の智慧以上のものでもあつかひれない。しかし、それは同時に現現象への横すべりをおのれの内部に映起するものであることを想わなければ行かない。大きな論理である。だが、それがいかに大きな裂け目であらうとも見えてしまったからには、それは避けて通ることを許さず、威厳とした岩盤である。思想のドリルは、支持性の一点において静かなる回転を得ず、めぐる。それはやがて支配の感性的基盤へむかって行かざるを得ず、わたしはその地点への凝視のみ、かたかく心に秘めて行こう。この細々として湿り気多い、時として岩盤事故すら呼び起す、さう、いくばくも華々しき、すらすら有さない回路は、状況がわたしの理想を起してはるかに悪化しようとも、唯一これだけの回路なのである。

区Vとして貫徹しようとする蛇行の内にも、こうしたエネルギーへの至近を見ることが出来るだろう。心情的な波高である。不定型、それでいて可視の集団の美名にしてみれば、デモを見るために遠方より出かけて来る人々、競輪などの八百長騒ぎに人混みを持つ人々、その他のの人々も、この集団の美名に付きますそれ自身を貫いて一つの現象を押し出しているのだ。更に付け加えれば、こうした人混みに欠くべからざるものは酒と火であることは明瞭一点の曇りなしと云うところだろう。

ランボーは▲意識は文字を、慰安には獄庭を、歩み行くこの世には決意を、▼(6)と近代市民社会を語っているのだが……
可視の領域のみが大手をふるってまかり通っている。そして、社会関係と総称される日常の中には、数知れぬ人事実Vが散在している。目に見えないものが全てであり、見えるものだけを見て行こうとするのが、こうした関係の論理であり、通念と呼ばれるもの正体である。そこで問題となるのは、おおよそトータルな認識作用ではなく、何が人事実Vであるかとする事柄が、人事実Vのうちどれを掴むかとするロジックのみであらう。ここには社会総体に対する関係概念への透視はない。目に見えるという直感性だけが頼りであり、時としてそれは至上的に作用する。だが、わたしにとって意識に身を染めるのは、わたしの内に向くベクトルが動くことである。わたしのラセン階段は昇りでも降ることも可能であり、わたしによって下降意志を有すること、可視の領域で、見えるものと見えないものを繋ぎ、易々とそれを関係として行くこと、さうして拒絶することであり、そして転位して行く不可視の領域において通念への拒絶は、こうした意識のベクトル

である。
依然として政治は有効性の領域や多数の領域を離さずかかえ込み、一切を裁断する事に血道を上げていく。現在、わたしがまきもれなく六十年代後半を生きていることには絶えぬことなく▲かくして、死者は永遠の沈黙の世界に去り、多くの人々はもとの偽象へと同帰し、古い偽象の裂け目においては新たな偽象がこれに上りかわり、それをうすめた。そして一切の思想の根柢に死の空洞をみななければならぬ。己れの取扱のための現実の支点を自らつき破り、一切を偽象としなければならぬ。それは、敗北の極北への道を通って、▼(7)とする一文が浮沈をくり返している。
そして、ここにこそポツカリと口をあげた単独者の回路がみえにくれている。わたしは、さうした回路を通って行く以外にはない。心した孤独である。

文中の引用は左記の通りである。

- (1) 谷川雁 ▲「帰館」(詩集選)
- (2) ドストエフスキー ▲「地下生活者の手記」
- (3) ドストエフスキー ▲「前掲書」
- (4) ロマン・グレー ▲「アプレ」
- (5) 上野英信 ▲「日本論漫説」
- (6) A・ランボー ▲「デモクラシー」(詩集イリュミネーション)
- (7) 常木守 ▲「6・15安保裁判冒頭陳述書」

『マックス・ヴェーバー』と私

田村 雅之

(本学商学部三年)

私は大学入学当時、某教授が講義の中でわざわざ非論理的にかつ非学問的にマルクス経済学ならびにマルクス主義の批判を学生に語っていたのをその中の一人として非常な苦痛をもって聴いていた。当時私はマルクスの書などたまた一冊も読んでいなかったし、またほとんど知らないのも同然であった。その時期に偶然マックス・ヴェーバーの『職業としての学問』、『職業としての政治』を読んだのである。が、そこでヴェーバーは職業に就いて学問を研究する者が演壇に上るとしての態度はどのような態度が望まれるかを論じて私が某教授に対して持ったきわめてネガティブな態度を例に出して、主観的な価値観が社会科学の認識を誤らせるものとして批判している。このようにすることで、ヴェーバーと私の出会いは少々大

契機な表現ではあるが、ある種の驚愕と歓喜の中でのものだった。その日一晩、興奮してはいたせいか、勇気づけられたせいか、早速某教授の所へ手紙を書き出そうと思ひ、「先生はマックス・ヴェーバーの『職業としての学問』をお読みになりましたでしょうか、私は先生の講義の中に……」と書き出した。今になってみれば恥ずかしい話であるが、その時分、俺はこんなことをしながら「手紙なんか出さないで」ヴェーバーをヤルぞ……と意気がって一応手紙を出すことをやめたのである。

そのような個人的な体験を作り出した「職業としての学問」の内容は、おおよそ大学の教育において美徳的な価値観が代表されるべきであるか如何であらうか、という問題が主題であった。ヴェーバーはこの問いに対して、教授は教壇の上にあつては教師として振舞うべきであつて、決して指導者や煽動家は教室の演壇に上るべきではないと答えている。これは学問の党派性、社会科学の認識の問題に直接関係を持つて登場する。

私にとって某教授はマックス・ヴェーバーのさらにはK・マルクスの紹介者として、極めてイロニカルな表現ではあるが、私の数少ない恩師の一人である。

以後、私はヴェーバーに非常な興味を持ち、彼の学問的態度あるいは学問体系にひかれていた。

ヴェーバーの世界は、戦中・戦後の苦悩にみちた体験とそこに生じたきざりでのヴェーバーの問題状況に裏打ちされて出てくる世界である。これは日本のヴェーバー研究の先陣をゆく人達(例えば大塚久雄、安藤英治、U・S・W)のそれと奇妙な一致を見ることが出来る。そこではあたかもヴェーバーが持つた如くの絶望的状況

目前に存在している、その中での方法論研究が一種の哲学にまで昇華する、すさまじい気魄のみなきつた世界が存在するのである。その名はSteno mortale(命がけの飛躍)である。

私のような社会学にはほとんど無知なものが、ヴェーバーをいくらかでも理解しようとするは、彼の学問論、客観性、価値自由性、形式的思考(「理念型」[Ideal type]のこと)、客観的「可能性」の意味を追究しながら追求する一方、他方では方法論のものをエトストとしてとらえなおす方向しか残された道はないであろう。そこに引き出される体験的ヴェーバー像は、一つは「日常性逸脱への警告」であり、他は「日常性埋没への反対」である。日常性逸脱への警告は主として彼が革命的浪漫派と呼ぶライカールズ、およびニッチェ流の超人思想に向けられた。日常性埋没への反対は20世紀初頭、いわゆる「新局面」に立つ根本的な問題論であった。マックス・ヴェーバー「研究」(岩波P.6)。彼はこの二つのタイプに反対する内面的動機を持った人間を想起する。この人間像こそヴェーバーの人間像なのである。この人間を持つ精神は誠実と責任を重んじる精神(騎士的)に他ならない。学問の客観性は自己を対象化する精神のうえに成り立ち、またそれは価値判断と知的探求との緊張関係とすなわてダイナミクスに支えられたそれを供なっている。このように、歴史的・経済的現実世界は、まさしく多元的な価値領域の社会的緊張とすなわてダイナミクスに支えられたそれを供なっている。だがしかし、その可能性が現実化するためには、あくまで在位の創造的行為による以外にはない。人間が科学すること、その人間が創造する側面が——現実の状況の中で日々決断するという側面——が脱

落すれば、彼のいわゆる「客観性」と「没価値的認識」の要請はとめどないデカダンスへと陥落しかねない。(大塚久雄編『マックス・ヴェーバー「研究」』P.172)というならぬヴェーバーも「ゲルトルク」の学問論の深淵を一瞬目を見張つたのである。が、それも一瞬であつた。彼は確信した。「客観性が主観的前提の自覚の上で成り立つ」ことを知っていた。が、その主観的客観性は次の段階において自己そのもの内化を必然的に経るのではないだろうか。さうしたら、彼の変革の客観的可能性は、主体そのものの中に更に主体的客観性の中にもなければならないのではないだろうか。

私は極めて重要な地点でヴェーバーの学問論・方法論のアポリアにぶつかったのである。「没価値的」認識とは何か、変革のパス・ペクティオとその実現とはいかに関係があるのか。この問いは今日まで私の問題意識の底辺に存在している。そしてこの問いの投げかけと同時に、私はマルクスの方法論を知つたのである。また、この問題は今日でも「ヴェーバーとマルクス」という問題の中で論争という形をとって顕在化している。「ヴェーバーとマルクス」というような問題提起の仕方は非常に困難な問題の提起の仕方だと思われ、つまり、簡単に言えば是非が何なのかその対象設定の不明瞭さのために全体的マルクス像と全体的ヴェーバー像との比較に陥りやすかつたり、あるいはマルクス主義と非マルクス主義というようなイデオロギイ的対立になつてしまつたりしてしまつたりする危険性がある。だが私に言わせれば「ヴェーバーとマルクス」という問題提起は、既存のマルクスをヴェーバーをどうとらえるかという

が必要だ」と答えるのに対して「制度や相互の対話に至る前に、教授や学生自身の中に、はたして本質的コミュニケーションが可能なのかの内実なり蓋然性があり、あるのかどうかをまず自らに問わなければならない」と答えるだろうと、ぼくは確信しています。しかしながら、もしぼくらが大学闘争を徹底的に闘おうとするならば、置かれてある大学を潰し、自らが学生である事を拒絶する決意が前提され、そうした決意をデモに初めて主体的に開いていこうというのですが、その決意の質の問題なのか、闘う主体の決定的なイメージの力の貧困の故なのか、今定かには言えません。未だ大学闘争が党派の動員数確保や組織化の途であったり、結局の所、制度的改編の問題に矮小化していかざるを得ない様な要素を内包しているという困難な主観的、客観的情况があることは否定できない様だと思います。

お知らせ

駿台論潮二〇周年記念事業(記録・明治大学戦後史)の連載につきましてお知らせ致します。今迄諸般の事情により永らく休載してまいりました「記録・明治大学戦後史(一九五六年四月—一九五九年三月)第四(章)」を、次回七〇号に掲載することになりましたので、お詫びながらこれまで御指示に關係者一層深く感謝するとともに、今後ともより一層の御支援を御願ひ申し上げます。

「記録・明治大学戦後史」編集責任委員会

当時散散と混迷という言葉に象徴されていた状況は変わったのか、あるいはそれを交える事ができたのかと言え、運動の場が言われる中であつても、状況の本質はほとんど変わっていないし、交える事ができなかったと答えるしかありません。現在が学生運動の昂揚期であるとするならば、そしてその運動が六〇年安保を超越したものであるとするならば、戦後の学生運動史を読みながら湧き上がる抑えたい興奮を覚えた過去のあの運動の揚揚期とはこの様なものでしかなかったのか、という感慨を覚えずにはいられません。ぼくがあの決意を、決意したと思ひ込み、自らの問題意識の趣のままに強引に、しかもディカルに思考運動を展開し、それをまとめた実践運動を主体的に展開しているという思い込みは、ある事件(体験)といつてよいと思ひます)によって、そうした軌跡の根底的な再検証を迫られています。それはたとえばこうです。それまで自身は体制と反体制とは決して並列の關係にあるのではないという事を自覚しているつもりで自ら「反体制」の側に

置いていたのですが、その事がいざ生きた現実の場で退く事を許さない形で開かれた時に、そうした自覚がいわゆる思い込みでなかった事も踏まえてしまつた、そして闘と闘う事、実践という事が、もうもうと言ひ言ひ方が許されるというならば日常と非日常の総体の中でその意味を持つし、問わなければならないという、あまりにも激しい現実を突き付けられてしまつたので、そして、その事が現在反体制を自称する組織、そして反体制運動を志向していると思ひ込んでいるぼくの反体制とは依然としてカッコ付きの反体制ではないという激しい認識をばく必要(そうまさに必要)だつたのです。そしてまた、

今頃はこの時期期に於ける学生運動に参加(具体的にはデモ)しながらも、内実としては一連の闘争の外側に在らざるをえないという自らの立場を苦しいが、しかし一種の有益性(あるいは優位性)をもつて噛み締めている訳です。それはたとえば、デモの上滑り、あるいはその事を主体的に告発しない運動主体の問題、自らの醜態の露呈あるいはもつと増えな言ひ方をすれば告発といった形でそれに加わる事ができないのです。それは現在の「反体制」運動の日本の土壌に(あるいは大衆に)根をたかさない運動の上滑り、あるいはその事を主体的に告発しない運動主体の問題、依然として権力側の政治にその形をばく闘争を展開できない、七〇年安保を前にしてようやく予定調和的に運動が揚揚をみせた様(に)の故とも言えるかもしれません。しかしながら、それよりもむ

受ける闘いえないという主観的問題としてぼく自身に引きつけてゆかなければならぬものとしてあるのです。それは組織に包含されながらも極めてすすみしした変革の論理を携へて「革命的理論なくして革命的実践なし。革命的実践なくして革命的理論なし」と言ひ切れる極めて健康的な部分を横目に見ながら、与えられてある自らの現実自らの孤絶した力で切り開いてゆくしかない決意した(あるいは決意せざるをえなかつた)ぼくにとって、デモの隊列に入る事が、そうしたいわば困難な孤絶した闘いを開いていこうと思ひながらも、それが有効性の計にはからぬが故に、自らの全体を地道に開くわけならぬという困難さの故にそれが完結されるという夢をだにみる事ができないという、ぼくの閉ざされた普遍からの派生の部分でしかありえないのです。自らの思想を実践行動に移行するといった健康的な運動形態を取りうる現実と主観的要素は、今のぼくにとって存在しないのです。

デモによって「ボトムアップの透視力」を持つ事もなく、ただ体制と「反体制」の田圃の中から弾き出される自らを見出し出すしかないのです。自らが明確に「反体制」側であるかのごとく錯覚させる、あのヘルメットをかぶる時の生理的な憎悪、その感情が何に因るに依つたのかは今定かには言ひきれないだけ、にもかかわらず、又デモの隊列に入つてしまつたという自らの精神構造を今明確に論理化する事はできませんが、隊列の中でシチュエーションを和唱する事が、機動隊と対峙する事が自らの思想の自覚とも、自らのそれに対する反逆と映つてくることが間々あるのです。そうした矛盾に満ちたぼくも、客観的政治の場では「我が同輩は何名動員し、かように果敢に闘つた」一人として存在してしまつたので

す。又、隊列に入つて「何かをやつた」と思ひ込むほど健康ではありえないばかりか、「何もやらない」と実感するしかないのです。こうしたぼくの心情に対して、自己否定という色あせてしまつた言葉を適用するほど、ぼくはオプティミストではないつもりです。それは、如何にぼくがリアリティな行動をとつてみても依然として、自らの背後に与えられてアディカルな行動をとつてみても隊列の中に在るといふ、当然といえは当然、だからこそ恐ろしい事実を認めざるをえないのです。

ぼくらの運動に対する種々の社会面評価はこうしたばかりにとつて何の意味も持たないし、言う事がなくなつた知識人の余興位にしか映らないのです。たとえば「学生は観念的存在であるが、しかしこれも意味を持つのだ」といふ、ぼくらに対する評判を激しいが親切な指摘として受けとめておくと、も、やはりぼくはぼくである為には、そして今置かれてあるぼくでありたいと思ひながら、ぼくはぼくの自身が置かれてある、場面に固執するしかないだろうし、如何に生活者の重みとか労働者の顔外を横目に見ながら、それだけでぼくにとつて何の意味も持たない事は明白な事です。少なくとも「将来労働者になるのか何よりもまず」「プロレタリアの意識を」「労働者との連帯」とかいつた発想からは、無縁でありたいと思ひます。

ぼくは今、新しい、再登場したかみ、学生運動に開いて、完全に客観的に語りうるほど、その持つ根柢から無縁ではありえないが故に、ほとんど心情表出に終つてしまつたが、にもかわらざつたこの事を、ぼくは重く問いかけてしまつた。ぼくは、ぼくは返書になりうるのではないと思ひます。

未来の記憶のなかで

河上 誠(仮名)
(本学政経学部一年)

留置所の朝は看守の「起床」の音で目覚める。私たはいつせいに薄いカーテンを引、部屋の掃除に伺う。窓枠で金網の外の窓を開け、朝の冷たい新鮮な空気を吸い、息を吐き出す。国家権力の儀で私は清い朝を享受し「今日も自分は生きてる」という感激した「生」を意識する。今日もまた、金網越しに見える電線に薄汚れたスズメが二羽、私をじっと見つめている。人そこには、自由があるのか。私は何年かここで生活しているのかのように手際よく掃除・洗面・手洗いをすませて「点呼」を待つ、そしていつも通りの頑丈な金網の張られた窓と鉄格子。冷たい壁。板敷の上に敷かれたゴザの上で、一日中壁に寄りかかっている生活。地の底から伝わりくるような底冷えのする寒さの中で、焦点の定まらぬまま厚い壁を凝視する。何も書かずただただ時間の経過を待つうちに

ちが、始まる。

金網越しにみる空はあくまでも着く澄みきっている。実に若い。なにが留置所からみる空にしてはあまりにも青すぎる、晴れた。たぶん二十三日たつた日数だけ、留置された人間にとつて過去は不用だ。未来の決められた日数だけ、特殊な留置所にはある。

バケツの音が聞える。運動の時間だ。軽い体操とタバコが吸える、房から解放される唯一の時間だ。ここでの一服はタバコ一本で二十本分以上ニコチンを感じる。私の胃腸は日増しにかなり弱ってきたがそれでもタバコはやめられない。たとえ胃に負担がかかろうと薬しむると出来ぬ留置所、確実、期待できる「薬しむる」ものはタバコだけだ。八層程度のコンクリートの運動場は運動場とよりサーカスの檻である。周囲を鉄格子で囲まれ、猛獣をあやむる調教師がいつも私たちを監視している。鉄格子を通して射し込む陽光は、房の中で感じぬ暖かさで私たちが留置人を包んでくれる。鉄格子で囲まれているとは言え、外気が遮断されるはずはないのに、何故か私には、檻の中の空気が濁つてみ

えるのは錯覚だつたのだろうか。青白く病人のような顔色の私たちの顔は陽の光りを浴びて、そう白くみえたが、房の中の暗さからいざ時がとれ、解放された高層ビルからその顔々は生々しくえた。窃盗・傷害・詐欺・婦女暴行・強盗未遂・強盗致死と種々雑々な階層の人々が留置されているが、こういう状況の中にあつては彼らは実に落ち着いている。そして個々の顔と罪名を照らしてみる時、そこに見えるのは生活の持つ恐ろしさである。その罪名の裏にはきまつて生活と結びつく面が表出している。生活……

あまりに落ち着いた今にも胸れそな落ち着き。自己欺瞞、何かが起こつた。青いヘルメットの群れ。包囲された。完全に、逃げ惑う学生。恐怖が作りだす音外の音。恐怖音。警棒の乱打。私の上ツトに直接感じる衝激波と激教育。小さくうずくまっていた。私の上に黒い巨体が。私の体は宙に浮いた。黒い群れと銀色の檻の中に、はうり込まれ足・手・警棒が私の眼に入つたすべてが私の体に激突してくる。身を反り横転する。意志とはかわりなく私の体は立ち上がる。眼の前が一、二度激突とともにピカッと光り後転する私。眼が回り身の自由がきかない。恐怖も痛みも感じない。魔の世界の踊り。踊り。沈黙の踊り。

意識がぼんやりして来た頃、手錠が手首に食い込んだまま引きつられて自分の姿がテレビライオンの眩しきの中に浮き彫りされていた。手錠が痛い。薄い刃のような手錠がいた。大きく腫れた右顔が鉛のように重かった……

ぞくぞくする寒さで服をきたした。朝は正確に昨日の朝と同じにやつてきた。どんよりと鉛色の雲がたれこめた寒さが肌を刺す寒い

朝だった。熱帯地ははつきりしていたし、暑の痛みは全身に感じられたが、痛みはなかつた。右腕の腫れは境界を過ぎる煩わしさがあつたが、痛みはなかつた。同じ房の人の見様見相でモーフをたみ掃除を手伝ふ。粗末な食事に空腹を満たし、寝るに際して、初めて自分は囚われの身であることをはつきり意識した。かその反面、そこに居る自分があることははつきり意識した。かその反面、そこに居る自分があることははつきり意識した。かその反面、そこに居る自分があることははつきり意識した。

内を融けはじめ、息の詰るような重い空気はともに見が狂わんばかりに私の精神は乱れに乱れ、不安感を拡大させ、張り裂けんばかりに胸を締めつけられた。ああ、一分待とう、それでもうたまたまから大声を出そう。そう自分に言い聞かせながら、ただひたすら時の経過を待たせよ。時間に耐えよ。今は、房で一番気の安まる時刻は夕暮時であるがその時はその房の赤暗、静寂に、重圧感の血肉にまで突き刺さってくるのが痛いと感ぜられた。出たい、外へ出たい。現実の社会の中に自由を奪つていくの鉄格子と金網の外へ出たい。今では、観念したかのように落ちてしまつて、そんな日々も遠い過去の苦しみ思い出のように思つて座つて、自分かキザなほくも思ふが、ついで、こうして留置所での苦しい生活は再び返つた時に「思い出」以上のなにもかとして生き残っているだろう。

「十二番、ずいぶん落ちてきているな。」担当の声に私は物思いから目をさました。担当はよく話かけてきた。刑事や検事の前後は敵対心を燃やして、かたくなに沈黙を守る私も看守を憎む気になれず、担当は親切だった。鉄格子に閉められた看守の生活は体制の加担者というより、一通いの犯罪者。「ほんとうですか。」私の顔に生気が舞がえつた。毎数分の狂いもなく運ばれてきた食事は生命をかうじて維持できる程度の満足感ほどは遠い粗末なものであつた。空腹感はずかしく食事をしている時だけ満ちた。たとえ換

事との緊迫した時間の中にあつても食事や食べ物のことを忘れることがないくらい暇が減つてしまつた。留置された数日は敵対する国家権力の提供する自分を拘束する権力の食事を飢えた狼のように食ほその姿を侮蔑しながらもそうせざるを得ない腹腹を訴える自分に哀しく思つた。そして排進時間まで規則に合致させたい自分の癖が虚しかったが、拘留延長が言い渡された頃からかそんな感情も忘れ、恥も外聞もなく食事を欲し、食べ物で頭を「誰れからですか。」汗がびしょりかいてハアハア言ひながら

「お母さんからだ。汗がびしょりかいてハアハア言ひながら」

母のその姿は目に浮ぶ。母の涙が。不安な瞳が。おどおどしたようなその姿が。十月二十一日、家を出る時、母は眠つて。何も知らずに静かに眠つて。反戦運動の意味を考察する時、人類愛的地に固執した反戦やベトナム戦争の終結を目的とした反戦運動は何ら解決とは成り得ない。戦争への必然性を内化した体制と、それが作り出す民主主義のまわりの諸矛盾をはつきりと認識したところに運動はある。当然

然、反戦運動は反体制運動と止揚されなくてはならないだろう。あくまでも主体的意志の上に自己の思考運動の延長線上にあるデモへ自らを投ずるため、私は十月二十一日のデモの隊列に加わつた。私はその屈辱の場所を居ることに後悔はしない。抽身的イデオロジとして捉えられる不自由さをより明確化した国家権力の象徴たる留置所において、鉄格子と金網、厚い壁と錠という具体的自由を奪われ、現在の自己に後悔などしない。自己の主体を反戦のた

めに、自己の存在を反戦のために賭けた必然かもしれない結果なのだから。今の境は罪の意識など感ぜぬが逃げた状況判断を誤つた口惜しさだけが際出している。更に「連V」が悪かつたのだ。だが、しかし、脱獄をかくする時の横顔の前にかかっていたことはすべていつ別れるかわからぬ精神を支える「強がり」と化してしまふ。私が罪の意識を感じた。刑罰の前の母は泣いてと聞くたびに母を犯罪者の一人にかりた。また、肉親を利用したと聞く心理を乱そうとする警察権力の卑劣さ(当然だが)に怒りや覚えると同時に私の行動がすべて母に換言され、法を犯したのではない母を傷つけたという激情に胸が締めつけられた。逮捕されることも覚悟で参加した私は留置所であつた苦さにも耐えねばならぬ義務があるが、母にどんな義務があつたか。仕事を待つては、愛の愛情の少なさを痛く感じている。その愛のひつとつとして、私を自由に何の干渉もなす育て上げた。私はその自由が輝きかつたがその自由の中に私や母をよくめた体制に對するデモが内包されてきたことを母は知つてはすなわ、私は今後、も成組織の回転軸に自らを失うことなくして、私の自己の問題として換言しながら、野ら大のよな生命力を持つて進んでゆきたい。しかし、反体制運動が自らの内からほんのりなるためには、母と家との訣別か、あるいはその運動の内に取組むか何らかの決断をなかならず必要とするであらう。母との訣別

△ああ、活字がほしい。自立させる強固な活字がほしい。V 大腹を空洞化する意図に怒りと焦りが、血肉をかきたてる。安

保は、目の前にちらつてい

武装とはなにか

——個的存在の思想的拠点——

乱れ舞う粉々に破いた千代紙の吹雪のように、存在する日常性の呈する世界は華麗な夢のようではない。一瞬のうちに円天井の下に設置された舞台上で繰り出される統制された芝居の光景。交交する諸々の日常の説明は、飛道具のように続けざまに高鳴る調子、即興は野辺送りの歌を歌うように。しかしこのようにして日常性の呈する世界を説明するわけにはゆかない。すべてが、台本通りの日常性と別をもちてやれば事足りるのが日常性の捉である。たとえ一つや二つの即興が演じられようとも、舞台は舞台である。いつてみれば、即興をも、秩序の日常性は台本の増幅に過ぎない。

退屈して舞台から円天井に眼を向けても、円天井は台詞を強いられた日常を黙通し演じていること以外、なににもなすことのない光景をただただ映すのみである。

このように、情況そのものである日常性の呈する世界は、空間に限定した儀式にも似た舞台上で演じられるものと言えらるのではないだろうか。

それ故に、こうした光景は舞台のみならず儀式に付随する「退屈」と、すべての営為に密着固定化への自己運動あるいは保守といったもの、そしてそれらが築く秩序の象徴ともいえる「狂騒」そのものである。

さて、こうした「退屈」とか「狂騒」とかいうことは、私達の存在する世界に於て何を指して言っているのであろうか。そうして、それらを言わしめる私達自身の思想的拠点を舞台の華麗な挨拶は存在しうるのだろうか。

主に、学生にこの風俗ファッションはあるものだと想われるが、警察機動隊の装備の先行性があり、すでに乱

赤、黒、黄、白、といった幾つかの色がヘルメットに施され、それを着帽した手に棒を持った時、棒はその時、唯の棒でなくなる。ゲバ棒と愛称をもつて口づかまれるほどに、このファッション・スタイルは白昼、風俗化され、これらに風俗の一端がある。

ヘルメットの材料が軽金属であろうが、樹脂であろうが風俗化した帽子の意味を何ら変えるものではないのである。同じように、ゲバ棒も、その素材が鉄であるのか、ゴムであるのか、木であるのかといった種類や質の問題ではない。色の付いたヘルメットを帽しその手にした棒をゲバ棒と呼べるのであって、風俗の中に罷り出たファッションである。

主に、学生にこの風俗ファッションはあるものだと想われるが、警察機動隊の装備の先行性があり、すでに乱

武装とはなにか

これらにA均衡Vの概念を生み出す、情況への後からの対応、つまり事象としての風俗化を可能ならしめた日常の対応、これらの意識を量による個の編入によって武装するとは不可能に等しいのである。

私にとってA武装Vとは、意識の先行形態から、国家に対する均衡としての装備ではなく、あくまでも不均衡としての個の対応であるように思うのである。

量と均衡による現象の形態ではなく、個の意識の対抗が生み出す不均衡、それは一定の形や形態による固定化された装備を、はじめに生み出すのではなく、色彩や形で現象するという武装形態を、初めにロゴスとパスがあり、それと共にA私Vが武装すると言ふように。

風俗としての武装に、参入者たちの固定化された意識が、すでに、国家死滅への戦士たらしめながらも、自分自身に色付けされたヘルメットの色彩(前衛党)の死滅に期待できない群の固定化した事実がある。それら大きく飲みこんだ国家秩序に自己否定、たえず自己否定を望み得ない絶望的世界の存在がある。

前衛党が一様に持つ綱領とその理論とは、本来的に言って情況への対応から生み出されたものである。綱領、理論によってその意識形態は武装されていて、現象としてのゲバ棒風俗は意識形態も風俗によってからめとられるのである。

綱領と理論は情況への風俗の対応によって、どのような前衛党も改良主義に没しているものである。集団としての風俗化は、個をそれよりたやすく、先行は綱領によることは不可能であり、誰一、個にあるのみである。綱領主義自身、情況に対応する手の内を公開しつづける改良主義であって、個に始まり、個に至るという永劫運動の自己運動を自かたに課してのことはあるが、個の死滅を自然に始まる、個に至るという永劫運動の自己運動を自かたに課しない「社会主義国家」をはじめとするあらゆる国家の末梢に至る構造、それらゲバ棒を挑む前衛集団(党)これらの均衡の、どこにも自かたを死滅に導かせる確たる綱領と理論が存在しないかぎり、私は、彼らに絶望し続けていく。

風俗としてのゲバ棒、ヘルメットへの意識的転換を自かたに課さないかぎり、私は、彼らに絶望し続けていく。

言わば、それはヘルメットという事柄の問題ではなく、意識の位相の問題である。ヘルメットが突然ハンチン、

否、民主主義の庄姫ローラの自己運動として動くであろう。

装備がそのように形式化されたことに、教室において女にベール(帽子)の着用を義務づけている流儀があるように、一種の儀式として、拒むと拒まざるに拘らず秩序の大きな増幅に放まれているのである。また、火薬やそれらの類の調査と準備をも含めて、装備は装備という繰り返す言がごとく白けたものになるのである。

身につけた、ゲバ棒、ヘルメット、火薬等々が、身につけた個人にとって外観としての装備を栄誉に思うものがないかぎり、その装備は白けた関係を浮きぼりにする。これも、なお武装したと言ひ難いのである。

ゲバ棒による遊撃戦術の光景や、投石戦火薬その他の火遊びの爆発の光景が、この現在性を何やらその時点でブツリと切り取られるのは爆破による時間帯の断絶が起り、次にくる時間の区分を何と名づけても判然としない恐怖を招くかといった推測に生まれる時、装備した者の側において、すでに秩序の均衡のルールを越えたか起えなかつたかという白けた関係の露呈を秩序によって強いられてくるのである。

いわゆる、警備、逮捕、裁判といった儀式への進行とそれへの線外作業は、そのことである。

いつてみれば国家秩序のルールの一つの動として純粋に法律とその刑の賦与の遊戯に還元されてしまうという苦いユーモアの押つけを喰うのである。ルールと分別の棒を越えたか越えなかつたかといった、その現象としての結果のみが裁きの対象になり、永遠にその動機は対象から外されるのである。

風俗化した装備とそのファッション・スタイルは一見、武装しているとの錯覚を街頭で自他共に受けているのではなからうか。

ことごとく、外在的現象化すればするほどに、その発端と過程にかかる思想的営為が何ほどにも生み出す、全く係りない庄姫ローラをくぐった民主主義のルールの押しつけに甘んじなければならぬ隠微に出会うのである。

破綻されねばならぬ結論的事項(秩序、ルール)に落ち入るの論理矛盾こそ、風俗として公認されるゆえんである。

現今のいわゆる武装風景が、均衡としての装備であり、これは、意識の上でも同じだと考えられるのである。その意識構造は、A均衡Vの概念によって組み立てられている。すなわち、現象に一步進したところから、現象としての事柄への接近を試みるという、いわば情況への先行的行動ではなく、情況への対応という形態を持つ思考から生まれた装備の現象性を強調した、眼にみえる、量を持つて測ることのできるものを選んでいくから

お茶の水

サンヤン OCHANOMIZU

喫茶和洋菓子 (291) 2725
 北京西洋料理部 (291) 2726
 釜めしおしろこ部 (291) 6388
 生ビール欧風料理部 (291) 0888
 予約御用件の方は (291) 0038
 パチンコ・いこい (291) 2725

SANYAN

明大前北口 パーマ・理髪・技術本位

信頼と人気のある

西谷理美容室

TEL (321) 2953

お食事の店
 ビアレ스토랑

ボンボン

明治大学院前 TEL (291) 9410
 中央大学正門前 谷川ビル地下 TEL (253) 4093

モーニングサービス
 A, M, 9:00~P, M 1:00

純喫茶

アイリス

京王線明大前駅際
 TEL (321) 4505

神田で唯一! 学生のための特選欧米名画

12月31日→1月13日迄 1月14日→1月27日迄 1月28日→2月3日迄

茂みのなかの欲望 卒業 世界のティンエージャー
 アニマル 華麗なる賭けめ ざめめ
 続・わたしは女 暗くなるまで待って彼女の不道德な夢

神田スルガ台下 美津濃運動具店裏 **南明座** TEL (291) 8169

文化人のオアシス
 憩いの殿堂

人生劇場

神田神保町日活隣 TEL (294) 0891~4

受付 (291) 0368~9

株中央探偵社

結婚調査 素行調査 所在調査 産業調査 市場調査 企業調査

開業本社 都内千代田区小川町三の二〇
 関西本社 大阪市北区相立町一〇
 支社 全国主要都市

良心的な学生の店
 買と買入れ

丸重

神田日活裏通り
 TEL (291) 0482

高級和洋菓子

一不二

神田神保町
 TEL (291) 1222・6677~8

おいしいお食事
 御宴会

元六食堂

A.M. 7:30~P.M. 8:00
 神田神保町1の34
 TEL (291) 6564

TEA ROOM

はまゆう

明大前・日本学園通り
 TEL (328) 2497

サービスをモットーとし、
 ご奉仕を心掛けて居ります

盟食会加盟店 共通の割引食券
 をご利用下さい

明大前駅 中華料理 電話 (三二八) 八六七四番	明大前通り 中華食堂 電話 (三二八) 八五三九番	明大前郵便局並び 大衆天鉄羅食堂 電話 (三二八) 五八〇八番	駅隣正栄館前 美しい定食の店 電話 (三二二) 三三三八番	明大前正門通り 洋食の店 電話 (三二二) 〇一三八番	明大前すずらん通り 生そば・蒲焼 中華そば 電話 (三二二) 四七三六番	軽食 中華そば 電話 (三二二) 五三四八番	明大ストア隣 喫茶と御食事 二階喫茶 電話 (三二二) 七四一〇番
明大軒	栄楽	江戸一	ふじや食堂	もとはし	松泉食堂	煉生堂	あけぼの

明るい住いはガラスから
 熱帯魚各種ケース

共立ガラス

明大駅前
 TEL (三二二) 七六七七

サービスと信用の店
 文房具なら何でも揃う

寺島文具店

明大和泉スズラン通り
 TEL (三二八) 五七五八

